

牧久 ジャーナリスト

元・日本経済新聞社副社長 早稲田大学政経学部 昭和39年卒

【1】レジュメ

1. 千葉市・稲毛 白雲木の花の思い出 愛新覚羅溥傑・浩夫妻仮寓（総武線稲毛駅・浅間神社の杜・千葉市ゆかりの家—千葉市有形文化財）昭和12年4月3日婚儀
2. 中国王朝最後の皇帝・溥儀 満洲国建国の主役 愛新覚羅家の家系図 清朝滅亡と中華民国の5色旗、溥儀の中に「二人の人間」、婉容と文繡（側室）、紫禁城脱出
3. 紫禁城追放と張作霖爆殺事件 張作霖の北京入場、張作霖爆殺の謎、文繡との離婚
4. 満洲国の誕生 満州事変の謀略、東方のロレンス、虎口からの脱出、甘粕正彦と川島芳子 板垣征四郎の説得、大礼服にロイド頑強、高橋是清の激励、「皇弟」溥傑の帰還、植民地経営に精通したリットン調査団の面々
5. 満洲国の康德帝と秩父宮 「日満議定書」の調印、満洲国「行走」・林出賢次郎の「厳秘会見録」、熱河侵攻と国際連盟脱退、関東軍司令官の急死、満洲帝国の「康德帝」、溥傑の陸軍士官学校入学、大韓帝国最後の皇太子、秩父宮の満州訪問、吉岡安直中佐「帝室御用係」に
6. 天皇家との一体化の夢 70隻もの大艦隊、「母后」貞明皇太后の心配り、溥儀の側室選び、「二・二六事件」と「ハイラル事件」の衝撃、屈辱的な「秘密文書」、皇后婉容の不倫
7. 満洲国に天照大神を 浩と溥儀夫妻の初対面、盧溝橋事件—東條英機の満洲国、犬猿の仲、東條に依る林出排除、溥傑夫妻の長女・慧生の誕生、満洲国に天照大神を、溥儀が見た「三種の神器」、建国神廟の建立、ひとときの平安
8. 原爆、ソ連侵攻そして天子蒙塵 日米開戦と李香蘭、「馬賊の英雄」張景恵、荒れる溥儀、秘密にされた関東軍の南方転用、溥傑陸軍大学校へ、ソ連軍の満州侵攻
9. 満洲国消滅—浩と嫪生の流転 亡命先は京都、溥儀・溥傑をソ連に売り渡したのは誰だ、吉岡の獄中死、隠し持っていた財宝を、八路軍が機関銃を乱射して、国民党軍に担がれた藤田大佐、悲劇の通貨事件と野坂参三、「日本人はもうひとりもいない」、長春から吉林へ、婉容との別れ、佳木斯、そして北京へ、救出
10. 溥儀の「証言と告白」—東京裁判と撫順戦犯管理所 「東京裁判」出廷、脅迫されて皇帝に即位した」、日本側弁護団の反撃、もう一人のソ連側証人・瀬島龍三、高級捕虜収容所、マエレス学習会、中華人民共和国、ハバロフスクから撫順戦犯管理所へ、溥儀の改造教育、宮廷学生たちが離反、「学習組長」の溥傑、告白と告発
11. 周恩来—溥儀、溥傑、浩の運命を変えた人 慧生から周恩来への手紙、李王琴の面会、溥傑の特殊任務、日本人戦犯は一人の死刑もあってはならない、天城山心中、心中事件の真相、釈放、人間は変れるものです、北京へ

12. 文化大革命の嵐の中で 【文史専門委員】、5番目の妻、狂気の文化大革命、「日本帝国主義の走狗出て来い」、チキンラーメンが食べたい」、溥儀の最期
13. あいよって命を為す — 相依為命 日中国交回復、里帰り、周恩来の死と4人組の逮捕、「一緒に逝きたい」、明仁天皇・美智子皇后の訪中

【2】 書評から（ご参考まで） 時代に翻弄された皇帝らの姿を描く

—もうひとつの昭和史— (NIKKEI BUSINESS 2023.01.02 から)

「転生」 牧久著 小学館 3300円（税込み） の書評

作家 江上 剛氏

日本にとって「満州国」とは何だったのか。皇帝から戦犯となった溥儀や弟・溥傑ら時代に翻弄された人生を歴史の流れと共に描く。

本書は、膨大な資料と取材によって「満州国」皇帝だった愛新覚羅溥儀、弟溥傑と妻嵯峨浩、慧生・嫫生姉妹の「人生を辿ることで、幻の国「満州国」にアプローチする試みである」（著者）。

歴史の結果は分かっているにもかかわらず、私は本書が積み上げた歴史のファクトの重みに、何度も胸が潰されそうになった。溥儀らにとって「満州国」は日本の傀儡国家でなく、人生そのものだった。

溥儀は、孫文らの辛亥革命によって滅ぼされた清朝最後の皇帝として「清朝復辟（大政奉還）」を熱望していた。弟溥傑も復辟のために日本の士官学校で教育を受け、嵯峨侯爵家の浩と結婚する。

この結婚には政略的意味があったが、二人は終生愛し合う。満州に勢力を拡大する関東軍に、溥儀は復辟への希望を膨らませる。皇帝の立場に固執する溥儀と、中国における利権を確立したい日本。両者の利害が一致を見た結果。それが満州国だった。建国後、皇帝として日本を訪れた溥儀は大歓迎され、「自ら至高の権威を持った」と「最大の錯覚」を起こす。帰国後「日本の天皇家」との一体化を図るため、「満州国」天照大神をまつる建国神廟を建設した。

やがて敗戦。溥儀や溥傑たちの流転が始まる。それは「満州国」の夢を追った日本人たちの流転でもあった。浩と嫫生の苦難は筆舌に尽くし難い。「通化事件」という多くの日本人が中国共産党軍に虐殺された悲劇も詳述されており、胸が痛む。国家が破綻するということはこういうことか。

溥儀と溥傑はソ連に抑留される。溥儀は東京裁判の重要証人として出廷し、脅迫され、日本の意のままにならざるを得なかったとの証言を繰り返す。それは自分の罪を逃れるためであり「非常に遺憾」だったと、後に言ったという。

抑留先そして中国側の戦犯管理所でも皇帝として振舞おうとする溥儀が徐々に変化する。その姿が哀れでもある。溥儀は14年、溥傑は15年にわたり、収容された。そして文化大革命。溥儀も、溥傑も浩も革命の大嵐に翻弄される。溥儀は、大嵐の中で十分な治療も受けられず、寂しく死んでいく。最後に食べたいものは何かと聞かれた溥儀は、「日本のチキンラーメン」と答えた。

日中国交回復を実現した周恩来の配慮で昭和49年、溥傑、浩の帰国（訪日）が実現する。激しい時代の変遷も二人の愛を分かっことはできなかった。本書は「満州国」を巡る溥儀、溥傑、多く

の日本人たちの野望と絶望を見事に描くが、それを心揺さぶる感動作に成しえているのは溥傑と浩が貫いた愛である。

(参考 1) 写真



愛新覚羅溥儀 1934・3・1 皇帝



溥儀 1922・1 2 婉容婚礼



1937.・4・3 溥傑・浩挙式



稲毛仮寓で 1937 秋 2 人は新京へ



1935・4・6 溥儀の天皇訪問



1946・8 月溥儀東京裁判ソ連証人

『再び千葉海岸稲毛旧居を訪れて感あり』

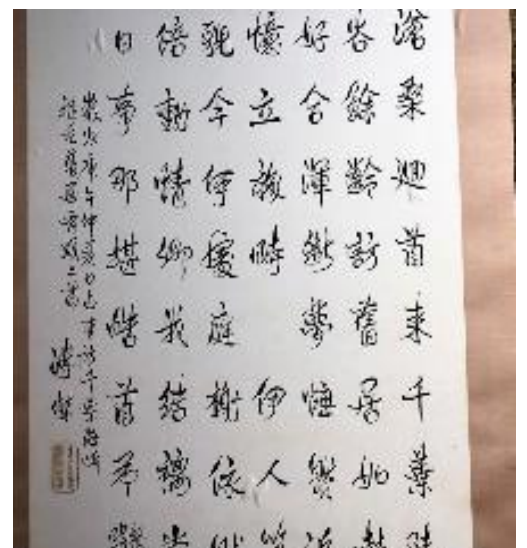
過ぎ去った歳月を顧みて再び千葉に来る。世の中はすでに大きく変わっているが、余齢をもって稲毛の旧居を訪れる。新婚当時は琴瑟相和して仲が良く、まるで夢のようだった。短い期間ではあったが思い出すとつい我を忘れてしまうほど幸せだった。

愛しい妻の姿と笑顔は今は何処に。昔のままの建物と庭を見ていると恋しい情が次々と湧いてくる。君と結婚したその日のことが目の前に浮かび、白髪いっぱいになった今にかつての愛の誓いを思い出すにはしのびない。再び千葉海岸稲毛旧居を訪れて感あり二首を詠む。』 溥傑

1990・5、浩3年祭時、溥傑83才、次女婿生同伴で稲毛を訪門、自詠自筆の書を残した。

(千葉市郷土博物館蔵)

溥傑は中国現代の三筆のひと



(参考 2)

